

(2) 小麦の歴史 －大正から昭和前半時代～交雑育種法が本格化－

1925年（大14）には、8,000haにまで減少した小麦作は、1926年（大15）に第一次の指定試験が琴似の本場（一部を北見支場で分担）に設置されたのを契機に、国の食糧増産政策によって息を吹き返しました。

昭和に入ってから徐々に作付面積が増加し、特に1932年（昭7）に、コムギ増殖5カ年計画がスタートしますと、作付けは急上昇し、1936年（昭11）には3万haの大台に乗りました。なかでも網走支庁の作付けは多く、最高時の1941年（昭16）には17,836haに達し、全道35,758haの50%を占めるに至りました。このようなことから、1937年（昭12）には、日清製粉北見工場が操業を開始しました。1945年（昭20）からまた徐々に減少しますが、1952年（昭27）年ころまでは、なお戦時経済の影響が残り、食糧増産が強く要望された時期で、全道の作付面積は2万ha台を維持していました。

大正から昭和にかけての品種改良は、導入品種の品種選抜試験に引き続き、1923年（大12）ころまでは、系統分離試験からいくつかの品種が育成されています。秋まき小麦では1919年（大8）「マーチン8号」、1923年（大12）「赤皮赤1号」、「ドーソン1号」、春まき小麦では1919年（大8）「札幌春小麦9号」、1923年（大12）「札幌春10号」等が育成されました。

交雑育種法を用いた本格的な育種は、1919年（大8）から始まっています。当時、小麦では、赤さび病と冬損の被害が大きく、その対策が小麦作の重要な課題でした。当時を振り返り、「病理研究者桑山 覚さんが、大々的にさび病と冬枯れの調査を行い、特に赤さび病に強い2品種を選び出してくれたことが、その後の小麦育種の柱になりました」と我孫子孝次さんは、「北海道農業よもやま話」の中で述懐しています。

その2品種は、秋まき小麦「ターキーレッド」と春まき小麦「ペロツルカ」です。「ターキーレッド」は冬枯れにも強く、「ペロツルカ」は硬粒種で、赤さび病にめっぽう強いものでした。1919年（大8）に、「赤錆不知1号」を生んだ「ターキーレッド」×「マーチンス・アンバー」、「農林3号」を生んだ「札幌春小麦」×「ペロツルカ」が、ともに交配されています。

秋まき小麦「赤錆不知1号」は、1927年（昭2）に優良品種となりました。この品種の出現によって、冬枯れと赤さび病の被害は、大幅に軽減されました。すなわち、寒さの厳しい北見や道北でも栽培が可能となり、秋まき小麦が全道的に栽培されるようになりました。「赤錆不知1号」は、その後、次の品種「ホクエイ」が現れるまで30年間にわたって、広くそして長く栽培され、北海道の小麦作を支えた大品種といえます。

「赤錆不知1号」は、栽培された30年間に、残念ながら段々と赤さび病に罹るようになりました。それは赤さび病にめっぽう強かった「農林3号」でも同様で、レースの分化によって、罹病化するようになったからで、その後、日本でも赤さび病のレースと、耐病性の研究が行われるようになった基となっています。

1954年（昭29）には、「赤錆不知1号」に変わる品種として、「ホクエイ」が育成されました。これは「赤錆不知1号」×「東北67号」の交配に由来します。「ホクエイ」は、「赤錆不知1号」の冬枯れに強い性質と、「東北67号」の短強稈の性質が結びついた品種で、赤さび病抵抗性も著しく改良されました。「ホクエイ」の出現で、その後の秋まき小麦の作付割合が急増しますが、それは冬枯れに強く、全道で栽培することが可能であったことと、短強稈で多収の特性を生かして、往復播きが普及したからで、その後、小麦の反収が著しく向上しました。

春まき小麦「農林3号」は、1930年（昭5）に「赤錆不知1号」から3年遅れて品種となりました。「札幌春小麦」×「ペロツルカ」の交配に由来しますが、「ペロツルカ」は四倍体で、異質六倍体の「札幌春小麦」とは「種」を異にします。そのため育種には多大の労力を伴いました。我孫子孝次さんはその苦労話について、アメリカの文献で他人が成功しているのでやる気になったこと、初期世代に不稔個体が多く出ますが、精力的に育種を展開して、選抜を繰り返すことによって、パン小麦の育成が可能だと信じたことが語られ、さらに、この学術的に貴重な育種事業を、きちんと記録すべきだったと残念がっておられます。しかし、この品種のおかげで、その後の春まき小麦の耐病性の基ができました。

その後、「農林3号」の改良型として、1938年（昭13）に「農林29号」が

育成されました。「農林29号」は短程で、きわめて多収だったことから、その後、春まき小麦の作付けが増大しました。春まき小麦は、パン用としてカナダ産春まき小麦が輸入されていました。そのため、北海道でもそれに匹敵するパン用品種を、育成することが願望でした。1938年（昭13）に優良品種となった「農林35号」は、「農林3号」と兄弟の「北海6号」に「マンチュリア142」を交配したもので、パン試験の結果では、カナダ小麦に遜色ない結果が得られました。しかし、残念ながら収量性では、「農林29号」に比較して劣ったことから、あまり栽培されることはありませんでした。

＜天野 洋一＞